

『懷硯』研究史ノート(3)

——近年の『懷硯』論と今後の課題——

有 働 裕

本稿は、西鶴作とされている浮世草子『懷硯』(貞享四年刊)の研究史を整理したものであり、すでに発表した拙稿『懷硯』研究史ノート(1)^(注1)・『懷硯』研究史ノート(2)^(注2)の続編にあたる。

本稿では、一九九〇年以降の研究を中心に整理しつつ、今後の『懷硯』研究の課題について言及を試みた。

七、伴山というフィルター——篠原氏の提起する課題

平成七年に発表された篠原進氏の「午後の『懷硯』」^(注3)は、出版社のPR誌に掲載された小論ながら、この時点での『懷硯』研究の課題を的確に指摘している。まずこの論稿の示唆するものを明らかにし、一九九〇年以降の研究を整理するた

めの手かがかりとしたい。
氏が注目したのは、案内役の伴山が初老に設定されていることであつた。そこから、西鶴は諸国話に「老い」のフィルター

をかけているという仮説が導き出される。

巻一の一「二王門の綱」冒頭には、人生の黄昏に近い身で「日暮れて道をいそぐ」、「僧にもあらず俗ともみへ」ない「おもしろおかしき法師」という、伴山の特異な人物像が示されている。これが読者の受容のあり方にある種の屈折をかけている、と氏は指摘する。

従来の言及の中には、必ずしも全編に伴山は登場しておらずその人物像も不明確だとして、趣向としての不備を指摘し、無視してもさしつかえない存在とするものさえあつた。ところが篠原氏は大胆にもその存在感を自明の前提とし、全章段に布衍させて『懷硯』を読み解こうとしている。伴山の設定が一定の趣向として機能していることの可能性は、前稿『懷硯』研究史ノート(2)^(注4)で示したとおり、すでに杉本好伸氏らによって指摘されていた^(注4)。それらを経た段階にふさわしい、新たな『懷硯』論の展開である。

そして氏は、伴山の「老い」と『懷硯』全体に水のイメージ

が透けて見えることを考え合わせている。雨や洪水といった天候、川、湖、海、そしてそれらに浮かぶ船という舞台設定、水浴びせや行水といった話材など、たしかに『懐硯』には水のイメージが頻出している。水は「不確かな存在である人間の換喻（メトニミー）」であるという。となれば、「集」としての『懐硯』の世界には、その存在の不確かさゆえの人間の悲哀が満ちていることになる。そのような世界に無常を感じて「共振する装置」にふさわしい年齢に、伴山はまさに設定されているというのである。

そして、『西鶴諸国ばなし』との差異はまさしくこの「共振する装置」「フィルター」としての伴山の存在にある、と述べている。『西鶴諸国ばなし』で示された奇異なる「はなしの世界」は、そのはなし手にとって（そして読者にとっても）外部に位置するものであり、みずからを相対化するものであった。ところが『懐硯』では、怪異性よりも人間心理に焦点が当てられて、伴山という共鳴装置が存在しているために、「はなしの世界」は内部世界に取り込まれていくことになる。悲惨な印象を与える話が多いということが『懐硯』についてしばしば言われるのは、読み手の思い込みによるものではなく、伴山の設定によって必然的に導かれた結果なのだといえそうである。

ただし、篠原氏の提示した伴山のイメージをそのまま受け入れ、そして、それを全章段にフィルターとして機能させてよい

かどうかは、検討の余地があるだろう。やや「古い」ばかりが強調され、伴山をシリアスにとらえすぎているような印象も受ける。

ところで篠原氏は、やや暗示的に、もう一つの重要な指摘をしている。『懐硯』は単なる諸国の奇談異聞集としてではなく、人倫の一つである夫婦の問題を追究するものであった（注5）という西島孜哉氏の見解の引用に続けて次のように述べる。

成否はともかく、夫婦を含めた（括弧つきの）へ制度へが人々の欲望を抑制していることは間違いない。それを攪拌した時に垣間見える「もう一人の自分」。吸水性の低い紙が可能にするデカルコマニー。初老の伴山はそんなドラマを転写する（装置）として適役だったし、単なる「狂言回し」や「能のワキ僧の役」（富士昭雄「西鶴の構想」『西鶴論叢』八六頁）ではなかった。

伴山を待ち受ける「邪見里」（巻二「椿は生木の手足」）「邪見の浜里」（巻四「見て帰る地獄極楽」）。「諸国咄」としての『懐硯』。それについて触れる紙数はない。ただ表微の裂け目に地方的特質が伺われることは確かだ（浮橋康彦氏「西鶴説話の地方的特性について——九州の話」『西鶴論叢』）。そしてテクストを反転した時、禁令（『御触書寛保集成』を横目に博奕（巻一「照を取昼舟の中」）・石打（同「案内しつてむかしの寝所」）・衣装贅沢（前掲・巻五「御代のさかりは江戸桜」）などに耽る人々のしたた

かさが、「不確かな」午後の鈍色の空の下に浮かび上がって来るのである。

『懷硯』の各説話は、円満で統一性のある物語世界として完結することがない。それは教訓としてとらえようとしても、また、悲劇としてとらえようとしても、どこかに綻びが生じている。その綻びにさまざまな「制度」の矛盾や歪みが露呈している、と氏の見解を言い直してもかまわないだろう。確かにこの作品では、「仏法の昼」（巻四の五）や「関戸さ、ぬ御代」（巻五の二）にはあつてはならないはずの現実が、随所に顔をのぞかせている。

かつて暉峻康隆氏が『懷硯』を文明批評という観点から評価したことがあった（注6）。その評価を、伴山設定の意味を問いつつ、全く別の角度から再検討する必要がある。

八、伴山論とネットワーク——平林氏の『懷硯』論

（1）伴山論の成立基盤

篠原氏によって提示された『懷硯』論の課題は、フィリターとしての伴山の機能の追究と、当代の政治・社会状況を視野に入れた読みの探求との二点であるといえる。このうち前者の課題については、平林香織氏が意欲的に検討を加えている。

平林氏はまず、『懷硯』の時間——巻三の三「気色の森の倒石塔」を中心として（注7）と『懷硯』における伴山（注8）

という二つの論文において、伴山を論じることそのものの妥当性を考察している。

繰り返し指摘されている通り、『懷硯』のすべての章に伴山が登場しているわけではない。また、伴山が登場している章であっても、人称の不一致や時制の混乱などが見られる。平林氏はまず、そのような伴山論成立にとっての否定的要素とでもいうべきものを、積極的に理解し直すことを試みた。

『懷硯』の人称の問題は、巻一の一の冒頭部分にまず見られる。「我」という一人称で語り始められながら、すぐに伴山自身が三人称で描写され、再び語り手となって作品世界の背後に姿を消していく。このような人称の揺れは読者に違和感を与えるのだが、この違和感を与えるほどの変化こそが、伴山のイメージを読者にとって確かなものにしている。そしてまた、人称の揺れは、時に行爲者となり時に見聞者となる伴山の多様な役割のあらわれであり、自在に変化しながらも、積極的に人の心を追い求めて行くおもしろおかしき僧という姿は一貫している。だから、巻一を読み進めて行くにつれて伴山についての記述は減少していくものの、読者の想像力に支えられて、その存在感は反比例的に濃厚になってゆく、と述べている。

また、巻三の三「気色の森の倒石塔」には、一話の中に夏と冬とが混在しており、それぞれが伴山が大隅の片里を一度目に訪れた時と二度目に訪れたときの話であった、と章末に付言されている。安易な執筆態度が生んだ混乱や帳尻合わせにとられ

かねないこの展開を、平林氏は作者の意図的な操作としてとらえる。すなわち、「消えない罪を背負い続ける娘の時間」と「進行する伴山の時間」とが並行して流れていることを暗示しようとして、あえて現実的には不自然な展開がなされている、というのである。

この作品にとって重要なのは、旅行見聞記としての整合性などではなく、人の心を追い求める旅の僧伴山のイメージの鮮明さである。そして実際に『懐硯』というテキストはそれだけの存在感を伴山に付与している、というのが氏の主張の核心であろう。確かに、『好色一代男』の世之介にしても、必ずしも主人公として扱われているわけではなく、詳細に分析すればするほど人物像は矛盾に満ちたものとなる。そうであっても、『好色一代男』を読み進めて行く読者は、おのずと世之介的な人物像をイメージせずにはいられないし、しだいにその存在感を濃厚に感じ取ることとなる。こういったことは、一代記としての形式が整っているか否かとはい、別の次元に存することといえるだろう。

そのように考えるならば、読者はたとえ伴山の登場しない場面であっても、その背後に「伴山という憎めない人物の確かな息遣い」を感じずにはいられないということになる。もはや「伴山を抜きにして本書を語ることができない」のであり、『懐硯』を読むという行為は、読者が「想像力を働かせて、与えられただけの情報から伴山の全体像を築いていくという創造的な

過程を経験する」ことを意味することとなる。

伴山に関する記述に着目して趣向としての伴山設定の可能性を論じたものに、先にも述べた杉本氏の説があった。そして、伴山を『懐硯』全体にかけられたフィルターとしてとらえる篠原氏の論があるわけだが、両者の間にはいくつかのステップの飛躍があるように感じられる。その中途の段階で処理されるべきいくつかの問題を、読者論的な発想で埋めているのが平林氏の諸論文であろう。各々の論文は必ずしも相互に意識されて書かれたわけではないが、このように整理して理解することが可能ではないか。

ここまでの平林氏の論稿は、巻三の三などの個々の章の理解については意見の分かれるところであろうが、伴山論とでもいうべき『懐硯』へのアプローチが成立しうることを提示したといつてよいだろう。

(2) ネットワーク論の可能性

では、伴山はいったいどのような役割を果たしているのか。平林氏は続く『『懐硯』と『東海道名所記』』(注9)においてそのことに言及している。

この論文で平林氏は、篠原氏の先の論稿での指摘をふまえて、「北山での優雅な生活をいさぎよく捨て去って旅に出た初老の男伴山というフィルター越しに」読者は作品世界に接することになると述べる。そして、執着心を持たない伴山というフィル

ターは、たとえば巻一の一「三王門の綱」では、權威の空しさや固執の愚かさを提示するのにふさわしいものとして機能している、とその役割を説明している。

さらに平林氏が強調するのは、「情報の媒体者としての伴山」の役割である。さまざまな世界が伴山によって意識的に統合されていく。それによって、『懷硯』の中の類似した話が相互に對比されて相対化され、「直接書かれていない部分についても雄弁に物語る」ことになるという。この発想は、氏が次に展開する『懷硯』ネットワーク論の前提となるものである。

しかしながら、伴山の特性は初老や無常観ばかりではない。魚鳥を食らい美女に耽る「おもしろおかしき僧」という一面もあった。そのことにはどのような意味があるのか。そこで平林氏は西島孜哉氏の次のような見解を引用する。

伴山のような權威のない半僧半俗の人物に語らせることによって、読者に判断をゆだねているのである。權威のない伴山のいうことであるから読者は批評の自由を獲得するところが出る。もちろん西鶴自身もそれに対して批評するところが可能な立場にたつことができる。(注10)

氏はこれを受けて「物語作者の目という一種超越的なまなざし」が伴山において確立している、とする。伴山の視線からの作者（あるいは読者）の視線の分離ということであろう。もっともな見解ではあるが、個々の話について、具体的にどのような「批評の自由」が考えられるのだろうか。フィルターを意識す

ることで、各章の理解がどのような觀念から解放たれ、どのような読みを可能にするのが問題となる。

ともあれ、平林氏は二つの方向性を示していると言ってよい。

一つは、「情報の媒体者としての伴山」の役割に注目し、各章を相互に関連づけながら読むこと。それは、集としての『懷硯』を意識することで、表面的には記述されていない何かを読み取ろうとする試みである。そして今一つは、「初老」であり「おもしろおかしき」僧である伴山の目を通すことが、読者の読みの方向性がある程度規定しているという発想である。

平林氏は、続く『懷硯』における話のネットワーク(注11)において、もっぱら前者に重点を置きつつ論を展開していくことになる。

氏はこの論文で、多様な内容と視点とを内包する『懷硯』という短編集を、伴山を中心とした統一的全体像として把握しようと試みている。そもそもこの作品に「多角的な読み取り」が可能なのも、『懷硯』全二十五章が「互いにネットワーク的な構造で連動し合っており、そのネットワークシステムが「各話のさまざまな情報をつなぐいくつもの回線からなっているからだ」とする。二十五章の中に散在する互いに共通する要素が伴山を介して関連づけられたとき、個々の要素は相対化され、表面的には記述されていない何かが浮かび上がってくる——そのような前提に立って氏は、『懷硯』の全体像の把握に挑んでいる。

では、具体的にはどのような形でそのネットワークは作動していると考えられるのか。

たとえば巻一の一「三王門の綱」、一の一「照を取昼舟の中」、二の一「後家に成ぞこなひ」、二の二「付たき物は命に浮桶」は、無常感を吐露しながら旅を続ける伴山が描かれている章であるが、同時にそれは金銭に執着する人間たちを描く章でもある。この両者が交錯するところに、「富に翻弄される人間の姿が立体的多面的に見えてくる」ことになる。その一方で、巻一の三「長持には時ならぬ太鼓」と四の三「文字すはる松江の鱸」にはともに貧しい浪人の娘が登場するが、一方は幸福な結婚をし他方は結婚することができずに尼となるというように、対照的に描き分けられている。

また、巻三では三の三「気色の森の倒石塔」で伴山の仏教者としての自覚が示されるとともに仏教色が強まりはじめ、巻四ではそのような展開の中で「金銭に対するバランス感覚を失った人間を多角的に捕らえる」傾向が前面に出てくる。ところが巻五では、反仏教・反宗教的な傾向が強まっていくととらえている。そして平林氏は、そこに「伴山における仏教其儘から仏教離れへの軌跡」が見て取れるとする。

伴山を軸とした「集」としてとらえたところに浮かび上がってくる、『懐硯』に内在する隠された意図を読み取る——ネットワーク論の発想は極めて魅力的な方法であると言ってよい。しかしながら氏の論述には、二つの問題点があるように思われ

る。

まず第一点は、個々の章の把握の仕方にみられるやや恣意的な傾向である。たとえば巻四の一「大盗人入相の鐘」の吐雲「五人の盗賊を自然に懺悔させてしまうほどの人物」ととらえ、巻四の仏教色の濃さの証左としているがどうだろうか。本章の中心はあくまで五人の盗賊の方だと思われるし、懺悔話的な形式を借りて書かれてはいても、この五人がこれをきっかけに改心したとは考えられない。また、四の五「見て帰る地獄極楽」にしても、仏教者を題材としていることは確かだが、詐欺僧と為政者の対決を多様な話柄を織り混ぜつつ描いたこの一話を「仏教色」の一語で片付けてしまうのはあまりに乱暴ではないだろうか（注12）。

読書行為が読み手の創造的な作業である以上、解釈に幅が生じるのは当然のことであり、恣意的なものとして退けられるべきは私の方かもしれない。とはいっても、ネットワークの想起の仕方によっては切り捨てられてしまう細部があり、また、その細部に重要な要素が含まれている可能性も十分にある。

さらにこれ以上に問題であると思われるのは、「伴山」そのものについての理解である。

魚鳥もあまざず食らう「おもしろおかしき」半僧半俗の男が、鎮魂の祈りを経て仏教者としての自覚を高め、さらには宗教を相対化するところまで成長して行く過程を読み取ろうとする教養小説的な読み方は、伴山という人格の中へ全作品世界に整

合性を持たせて取り込んでゆくことを前提とする。それは、氏自身が把握していたはずの伴山というユニークなキャラクターや、伴山からの「批評の自由」といった発想を否定してしまうことになりはしないだろうか。それは従来の『懷硯』論のあり方や物語りにおける全知全能的語り手像への埋没にもつながりかねないように思われる。

伴山Ⅱ西鶴というとりえ方の問題については、拙稿「『懷硯』研究史ノート（2）」において、『近代艶隠者』との関連で詳述した。そしてそこでは、『西鶴諸国ばなし』との比較から作家的成長を論じることへの反論として出発したはずの箕輪氏の論が、最終的には旧来の方向性に帰着してしまっていることを指摘した。平林氏の論述もまた、出発点においては明らかにそれらとは方向性を異にするものであったにもかかわらず、なぜか伴山Ⅱ西鶴の得悟へと向かう成長譚にからめとられてしまっているように思われる。

先の篠原氏の論についても言えることだが、作品全体にかかるフィルターとして伴山をとらえる論は、そのシリアスな一面——老いや無常といった側面の強調へと傾きがちである。そのことが、読みを必要以上に生真面目なものへと導き、また、旧来の作家論的な読みに引き戻しかねないようにも思われる。

九、夫婦という題材——西島氏の『懷硯』論

先にも述べたように、『懷硯』の各章を相互に関連させ、その対照性を足掛かりに想像力を飛翔させる——ネットワーク論という作品把握の方法は確かに魅力的である。『懷硯』のみならず西鶴の諸作品は、そもそもそのような形で読者の想像力を刺激する特性が備わっているといえなくもない。

杉本好伸氏は「西鶴と広島——〈似せ男〉趣向の淵源」(注13)と「西鶴と広島(続稿)——〈似せ男〉話の主題をめぐって」(注14)で、巻五の一「倅の似せ男」を『本朝二十不孝』巻四の一「善悪の二つ車」等と関連させて論じているが、これは『懷硯』という集を超えてのネットワーク的な作品把握の試みと云ってよいのかもしれない。

だが、『懷硯』という集の内部でのネットワークの存在を、平林氏とは別の角度から考えてみる必要がまだまだあるだろう。先にも引用したように、篠原氏は『懷硯』の世界に当代社会の負の側面が散見することを指摘している。旅を続ける伴山を待ち受けているのは「邪見里」や「邪見の浜里」の現実であった。一話の中心的テーマとは一見無関係でありながら、「表徴の裂け目」から顔をのぞかせているのは、禁令破りや犯罪者の横行する世の中である。これらが『懷硯』の内部で呼応し合うようなネットワークの可能性を考えることはできないのだろうか。フィルターとしての伴山の役割を前提としつつも、そこに単純に収斂されない世界が描かれていることをどうとらえるかに、今後の伴山論の課題が残されているように思われる。

もちろん、伴山に西鶴の実像を重ね合わせるといふとらえ方が、今日の『懷硯』論の一部をなしていることも事実である。そういった前提に立つての、ある種のネットワーク論の試みともいえるものとして、西島孜哉氏の『懷硯』論をあげることができる。

西島氏は、『懷硯』論——多彩な夫婦話（注15）において、『懷硯』五卷二十五話のうち十六話は何らかの形で夫婦の種々の問題を多角的に取り上げており、夫婦関係にまつたくふれていないのはわずか四話にすぎないと述べている。

また、巻一の一に描かれた、妻もなく家庭生活を持たない男がその「身の果」を案じてはかなさを感じ旅立つという設定は、『徒然草』百四十二段の記述を意識しつつ、人倫の一つの関係としての「夫婦の別」を主題として選択したことを示すもののだ、としている。

しかし西鶴は、儒教的な「夫婦の別」を教訓しようとはしない。儒教的教義では解釈しえない具体的事例を、人心の問題として注目しているのだ、と述べている。

たとえば巻一の一「後家に成りぞこなひ」は、一見女房の悪心が露呈したように読める章だが、直接的原因は弟達の家督争いにあり、悪心を抱かざるを得なかった背景には不安定な女房の立場があった。「夫婦の別」を観念的には教訓しえない、家督という財産相続の問題が介在している。

巻三の一「水浴は涙川」は、世間の無責任な言動が不幸を招

く話だが、そもその前提に妻の弱い立場——その立場を三下り半（三行半）によつて簡単に追われ、「其方に不義」があると簡単に断定されてしまう——が示されている。この話では妻のみが被害者なのであった。

巻五の一「佛の似せ男」は、封建道徳が支配する境遇における妻の人心を描いたものである。帰ってきた夫が偽物であることに女房が気づかないはずはない。それが明らかになった時、貞女とされてきた女房の心の中にあるものが露呈したわけである。それでも本当の夫であると主張する妻を、儒教的立場からは非難できても、人間的なあり方としては非難できない。

以上のように西島氏は、『懷硯』というネットワークに夫婦という回線を見出し、それによつて儒教的教義によつては処理することのできない人の心を浮かび上がらせたといつてよい。もちろん、氏自身も懸念しているように、全章において夫婦が論じられているととらえるには無理があるのだが、ある意味で平林氏の発想をより緻密な形で展開させたものととらえることができる。

とはいふものの、氏の論の基本的な方向性は、伴山と西鶴を直接に結び付け、『懷硯』の分析を通して西鶴の作家的成長を説明しようとするところにあった。それゆえにはなし手としての伴山への注目は、フィルターとしての役割——伴山の機能分析へと向かうことはない。伴山の取った態度から、執筆時の西鶴の「実像」の推定へと向かう。

そのこと自体は旧来の『懷硯』論によく見られた展開である。そしてその多くは、伴山の教訓的言辞を引用して、そこに西鶴の談理の姿勢を見出していた。しかし西島氏は、それらとは異なり、談理の姿勢は強くは感じられず、感想や教訓も決して有効なものとなりえていないことを指摘している。

たとえば、巻二の一ではこれといった主張も記されないまま甚九郎の出家で結びとなり、巻三の一では本題からややずれた形での戒めが述べられ、巻五の一では周囲の冷笑と無関心を記述するだけのあいまいな結末になっている。つまり、『懷硯』の各説話は、必ずしも伴山の所感の中に収まり切るようにはできていないのである。そしてそのことは、伴山を決して得悟の境地には浸らせてくれないのである。このように、伴山には収斂しきれない世界が描かれていることに着目しているところに、西島氏の論の特色がある。

先にも述べたとおり、氏はこのことを作品の趣向や伴山の機能としてはとらえていない。自己の論理による断定をせず、見聞者にとどまろうとするのは、西鶴の自信のなさの反映としてとらえているのである。この背景について、『懷硯』論序説——ターニング・ポイントとしての諸国話（注16）で次のように述べている。

『懷硯』の前後の作品では、『本朝二十不孝』にしろ『武道伝来期』にしろ、自信に満ちた語り口で教訓的な言辞が記されている。ところが、『懷硯』で西鶴は、権威のない半僧半俗の伴

山に語らせることで読者に判断をゆだね、判断を放棄している。これは「常に世相を批評してきた西鶴のあり方としては不可解」であって、西鶴の「人心の不可解さに対して適切な批評を下し得ない」自信のなさの反映ではないのか。

西島氏によれば、伴山の姿は、世の人心に対して判断を示し得ず「自己の問題意識の解決のための意図的な模索」を続ける作者西鶴の姿を反映であるということになる。そもそも西鶴が、普遍的テーマを諸国奇談集の形式で求めるという矛盾したことに挑戦したのは、今までの創作に思考と方法の行き詰まりを感じていたからであり、西鶴が創作上の大きな転換点に立っていたことを意味する。そのこともあって、従来関係の深かった書肆池田屋三郎右衛門や森田庄太郎との間にこの時期に亀裂が生じていた。氏はこのように推定し、『懷硯』に署名や刊記のないことをもそのことと関連づけて説明している。

十、『懷硯』論の課題——世相や幕政との関連から

篠原氏にしろ平林氏にしろ、伴山のフィクチャーとしての機能に注目しつつ、新たな作品理解の方向を模索している。そして、すでに述べたように、二人ともに、論究の過程において西島氏の論を引用している。

すなわち篠原氏は、夫婦に関する話題の多さへの西島氏の指摘を引用して、夫婦をはじめとする制度の矛盾に目を向けてし

もう伴山の視線に注目する必要性を説いた。平林氏は、おもしろおかしき僧という設定の意味への西島氏の言及を引いて、「批評の自由」の獲得という論旨を引き継いでいる。

しかしながら、両者はともに、西島氏の本来の文脈とは全く異なった形でそれらを引用している。伴山という半僧半俗の男が奇談の世界を前にして、それに対する明瞭な批判を下せないでいる姿に、西島氏は、悩める作者西鶴の実像を重ね合わせようとしている。それに対して、篠原氏や平林氏は、伴山設定の意味を、既存の価値観・倫理観から自由を確保するための装置というところに見いだそうとしている。

ここでこのような齟齬を指摘したのは、両氏の引用を誤用として批判したいからではもちろんない。「研究史ノート（2）」で指摘したとおり、推定した西鶴の「実像」から逆算的に導き出すという方法は、テキストの細部を無視した恣意的な読みに陥りやすい。また、西島氏の読みに限って言えば、伴山設定の意味には積極的な意味が見いだしく、最終的には『懷硯』に対する評価も否定的なものにならざるをえない。氏の把握した伴山——現実を前にして立ちつくし言葉を失っている伴山の姿を、作者の実像とは区別した機能としてとらえて、より精緻で包括的な読みを構築することはできないものだろうか。完璧なフィルターとはならないようにあえて設定された伴山によって、どのような批評の自由が獲得されたのかを、より具体的に追究しなければならないように思う。

『懷硯』の理解において、伴山が無視できない存在であることはもはや間違いないだろう。しかし、その設定の意味に着目しての具体的な各章の読みは、まだほとんど論じられていないといつてよいのではないだろうか。とりわけ、先にも述べたように、当時の社会状況や幕政等との関連において、伴山に着目した読みがもっと深められてよいように思う。

もちろん、伴山への着目を別にすれば、そのような試みがいままでなされなかったわけではない。「研究史ノート（2）」でも触れたが、箕輪吉次氏は巻一の五「案内しつてむかしの寝所」や巻二の四「鼓の色にまよふ人」に綱吉の孝道奨励策への懷疑を見出している（注17）。また、井口洋氏は巻三の五「誰かは住みし荒屋敷」と巻四の二「憂き目を見る竹の世の中」とに、行き過ぎた忠義孝行への皮肉を読み取っている（注18）。綱吉の將軍就任以来、『懷硯』の刊行までの七年間、武家には矢継ぎ早に綱紀肅正策が打ち出され、階層を問わず忠義孝行に励むことが求められた。この「善政」が施された「太平の世」の人心を見て回る伴山の目に飛び込んでくるのは、まさしく当代の制度によって歪められた人間心理の実態であった、といえなくもない。

ならば、伴山に着目して個々の「はなしの世界」への理解を深めながら、平行して『懷硯』という作品をトータルに論じることができないものか。伴山という人物の存在によって緩やかに束ねられた種々雑多な作品世界に、このような制度の破綻が

意図的にちりばめられているとしたら、『懷硯』に内在するネットワークは、より毒気を含んだ刺激的なものとして読むものの意識の中に浮かび上がることになる。

巻四の一「大盗人入相の鐘」は伴山の登場しない章である。代わりに、吐雲という僧が登場する。吐雲は、「よろず異風」で盗人とも酒を酌み交わす型破りな僧だが、清貧を樂しむとする無欲の人でもある。魚鳥を食らい美女と戯れながら、無常感を抱いてそれに執着しない伴山とは類似した性格を持つ。このような人物がいる以上、あえて伴山を登場させる必要はないのだろう。ただしこの一章では、諸国の人心を訪ねていくのではなく、諸国の人心の方が吐雲のいる寺に流れ込んでくるという形式が取られている。

寺に入り込んで吐雲と意気投合した六人は、盗人になったいきさつを懺悔話として語る。六人の話はそれぞれに関連性がなく、むしろあえて多様性を持たされている。そのことは、それぞれの出身が士農工商に坊主神主と、近世社会のすべての階層にわたるよう設定されていることからうかがえる。そしてここに描かれているのは、武芸に秀でているがために武家社会では生きていけなくなり墮落する侍、年貢を納めずに開き直る百姓、犯罪者に手を貸して儲ける職工、不正な商売で稼ぐ商人、色に溺れる僧侶、詐欺まがいの悪事を働く神主らの姿であった。話を終えた盗人たちは、「是は御燈^{ごとう}」と銀包を置いていくが、そこに反省や改心の気持ちがあったとは思えない。大笑

いの末に、「盗人のものはうけ給はず」と怒る吐雲を無視して無理やり錢箱に押し込んでゆくのである。六人の語った現実、六人各々が抱える世界のすさまじさは、無欲の僧の精神性などでは押さえ切れずに拡散し、不正と腐敗に満ちた現実を垣間見える小宇宙を形成していく。吐雲は、原拠の『十訓抄』の安養の尼のように、一話のまとめ役たりえない存在である。盗人たちの「善意」に翻弄されるその姿が、現実のすさまじさを一層印象づけている。

『懷硯』全体もまた同様にとらえ直すことができないだろうか。全国に忠孝札が立てられ、お上の威光があまねく照らす安泰の御代に散見する、数々の破綻。それを随所に垣間見せたのが、集としての『懷硯』という小宇宙ではなかったか。夫婦という話題の外に、忠義や孝行に関する言及が目立つことは、先の箕輪氏井口氏の指摘によらずとも見て取れよう。このような下手に扱うことのできない話題にふれるとなれば、作者の分身を登場させて堂々と談理を展開できるはずがない。作者は伴山の背後に隠れるほかないだろう。

もちろん、個々の章それぞれに中心となる話材やテーマがある。一見したところでは、忠義や孝行あるいは「制度」についての記述はきわめて瑣末なものにも思えたりする。しかし、展開上の重要な要素として印象深く読者の記憶に止められ、それらをネットワークとして意識し全体を眺めたときに、表面的には書かれていない意味が浮かび上がってくる。そのような形で

の『懷硯』の理解が、個々の章のより緻密な解釈の検討とともに、進められるべきではないだろうか。

以上で、いささか私的な興味に引き付けすぎはしたが、『懷硯』の研究史の整理を終えることとした。その内容・方法が多岐にわたっているため、私の力量不足から多くの有意義な論稿に言及できなかったことを反省しており、誤読・曲解も少なからず存するのではと危惧している。加えて本稿では、論旨を明確にしようと試み、あえて論文を发表順に扱わなかったことを御容赦願いたい。

そのような不備を補う意味もあって、『懷硯』に関する論文目録を最後に付することとした。

すでに箕輪氏のものがある(注¹⁹)ので、その後を継ぐ形で一九九二年以降に絞った。管見の限りのものをまとめたに過ぎないが、遺漏などお教えいただければ幸いである。

『懷硯』論文目録(一九九二年以降)

井口洋「水浴びせは涙川——『懷硯』解析」

『叙説』(奈良女子大学) 十九号 一九九二年十二月
吉江久弥「『懷硯』——新趣向の試み」

『解釈と鑑賞』五十八巻八号 一九九三年八月

吉江久弥「筍殺人事件考——怪異と人間」

『鳴尾説林』創刊号 一九九三年九月

西島孜哉「『懷硯』論序説——ターニング・ポイントとしての諸国話」

『鳴尾説林』創刊号 一九九三年九月

『西鶴 環境と営為に関する試論』(勉誠社・一九九八年)に再収

井上敏幸「西鶴の方法2」

谷脇理史・西島孜哉編『西鶴を学ぶ人のために』

世界思想社 一九九三年六月

平林香織「『懷硯』の時間——巻三の三「気色の森の倒石塔」を中心として」

『文芸研究』(東北大学) 一三六号 一九九四年五月

森田雅也「『西鶴諸国はなし』の形成——『懷硯』からの考察——」

水田潤編『近世文芸論 ロマネスクと変容』

翰林書房 一九九五年三月

西島孜哉「『懷硯』論——多彩な夫婦話」

『武庫川国文』四五号 一九九五年三月

『西鶴 環境と営為に関する試論』(勉誠社・一九九八年)に再収

篠原進「午後の『懷硯』」

『武蔵野文学』四三号 一九九五年十二月

平林香織「『懷硯』における伴山」

『文化』（東北大学）五十九卷三・四号 一九九六年三月
井上敏幸「西鶴本二題——『諸国ばなし』二の三と『懷硯』四の五」

長谷川強編『近世文学俯瞰』汲古書房 一九九七年五月
杉本好伸「西鶴と広島——〈似せ男〉趣向の淵源」

『安田女子大学大学院博士課程開設記念論文集』一九九七年三月

平林香織「『懷硯』と『東海道名所記』」

『文芸研究』（東北大学）一四三号 一九九七年一月
平林香織「『懷硯』における話のネットワーク」

『長野県短期大学紀要』五十二号 一九九七年十二月
杉本好伸「西鶴と広島（続稿）——〈似せ男〉話の主題をめぐって」

『安田女子大学大学院文学研究科紀要』三号 一九九八年三月

有働裕「『三王門の綱』試論——『懷硯』卷一の一の『三王』と『鬼』——」

『日本文学』四十八巻六号 一九九九年六月

吉江久弥「西鶴における「広い世界」「遠い国」——その旅と理念」

『鳴尾説林』七号 一九九九年十二月

有働裕「『見て帰る地獄極楽』試論——『懷硯』卷四の五の素材と伴山の役割——」

『国語国文学報』（愛知教育大学）第五十八集 二〇〇〇年三月

注

（注1）『懷硯』研究史ノート（1）『国語国文学報』第五十九集・二〇〇一年三月

（注2）『懷硯』研究史ノート（2）『愛知教育大学研究報告』第五十一輯・二〇〇二年三月

（注3）杉本好伸「『懷硯』の構成をめぐって」『安田女子大学国語国文学論集』十八号・一九八八年六月

（注4）篠原進「午後の『懷硯』」『武蔵野文学』四三号・一九九五年十二月

（注5）西島孜哉「『懷硯』論——多彩な夫婦話」『武庫川国文』四十五号・一九九五年三月

（注6）暉峻康隆「西鶴 評論と研究 上」中央公論社・昭和二十三年

（注7）平林香織「『懷硯』の時間——卷三の三「気色の森の倒石塔」を中心として」『文芸研究』一三六号・一九九四年五月

（注8）平林香織「『懷硯』における伴山」『文化』五十九巻三・四号 一九九六年三月

（注9）平林香織「『懷硯』と『東海道名所記』」『文芸研究』

一四三号・一九九七年一月

九五年

(注10) 西島孜哉『「懷硯」論序説——ターニング・ポイント

としての諸国話』『鳴尾説林』創刊号・一九九三年九月

(注11) 平林香織『「懷硯」における話のネットワーク』『長野
県短期大学紀要』五十二号・一九九七年十二月

(注12) 拙稿『見て帰る地獄極楽』試論——『懷硯』巻四の
五の素材と伴山の役割——『国語国文学報』第五十八
集・二〇〇〇年三月

(注13) 杉本好伸『西鶴と広島——〈似せ男〉趣向の淵源』
『安田女子大学大学院博士課程開設記念論文集』一九九
七年三月

(注14) 杉本好伸『西鶴と広島(続稿)——〈似せ男〉話の主
題をめぐって』『安田女子大学大学院文学研究科紀要』
三号・一九九八年三月

(注15) (注5) と同。

(注16) (注10) と同。

(注17) 箕輪吉次『「懷硯」と『近代艶隠者』——巻二の四
「鼓の色にまよふ人」の作者をめぐって』『学苑』四九四
号・一九八一年 同『懷硯の素材と方法』『学苑』五一
〇号・一九八二年六月

(注18) 井口洋『「懷硯」一面——「誰かは住みし荒屋敷」の
主題——』『叙説』十三号 一九八六年十月

(注19) 箕輪吉次『西鶴選集 懷硯(翻刻)』おうふう・一九

(うどう
ゆたか)